

特集 子供・若者の意識と求める支援について

調査結果のポイント

- 他者との関わりについて、「家族・親族」や「学校で出会った友人」との関わりが強く、困難経験が改善したきっかけについても「家族や友人の助け」と考える者が多いこと
- 公的な支援機関や専門家から支援を受ける場合に求める支援の形態について、様々なニーズがあることがうかがわれるとともに、メールやSNSによる相談を求める者が多いこと
- 困難を抱えたまま、誰にも相談したり、支援を受けたりしたいと思わない者が一定割合いること
- 困難改善経験があった者は、ほかの者に比べて社会参加への意識が高いことがうかがわれること

はじめに

- 内閣府では、令和元（2019）年度に「子供・若者の意識に関する調査」を実施した。（[図表1](#)）
- 今回の特集では、この調査の結果から見えてくる、子供・若者の意識の特徴的な結果について、人生観・充実度及び他者との関わり方、子供・若者が抱える困難、社会参加の観点から紹介する。

図表1 子供・若者の意識に関する調査（令和元年度）の概要

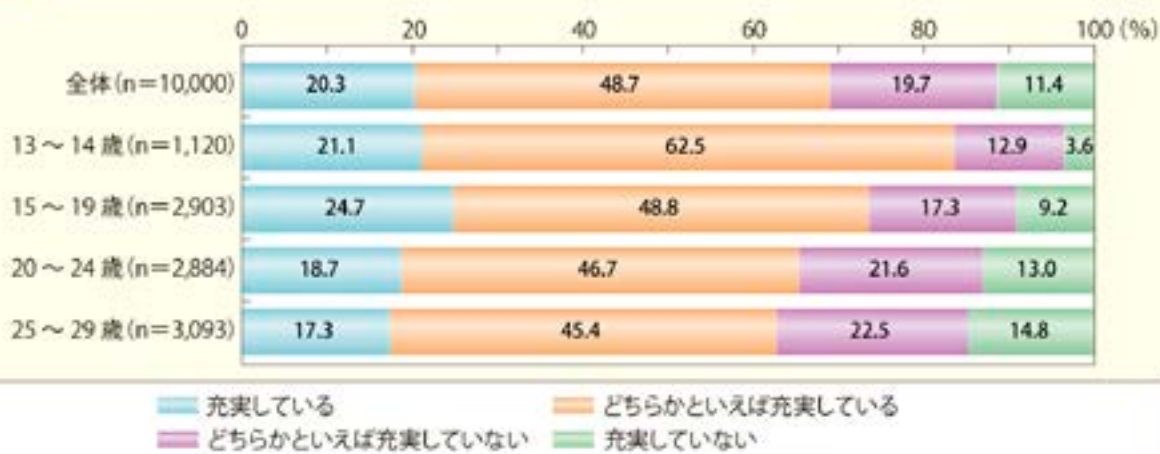
調査目的	子供・若者を取り巻く諸課題に対し、子供・若者がどのように考えているのか、また、政府、地方自治体、民間団体等による子供・若者育成支援施策について、子供・若者がどのように考え、どのような施策を期待しているのかなどを把握し、子供・若者育成支援施策の検討の参考とすることを目的とする。
調査地域	全国
調査対象者	満13歳から満29歳までの子供・若者（10,000サンプル）
調査時期	令和元年11月から12月
調査方法	インターネット調査 （調査会社に登録しているモニターに対し、インターネットを利用して調査票を配信し、回答を依頼） ※13～14歳については、保護者に調査協力の可否を確認後、協力可能と回答した子供を対象
調査領域	(1) 人生観・充実度 (2) 子供・若者が抱える困難 (3) 他者との関わり方 (4) 支援機関 (5) 学校や職場以外で他者で行う活動 (6) 社会参加 (7) 将来像

1. 人生観・充実度及び他者との関わり方について

ア 充実感

- 「今の生活が充実していると思いますか。」という質問に対する回答を見ると、「充実している」又は「どちらかといえば充実している」と回答した者の割合は68.9%であり、「充実していない」又は「どちらかといえば充実していない」と回答した者の割合の31.1%より高い結果となった。
- 年齢区分別でみると、「充実している」又は「どちらかといえば充実している」と回答した者の割合は、年代が若いほど高くなっており、13～14歳(83.6%)が最も高い結果となった。(図表2)

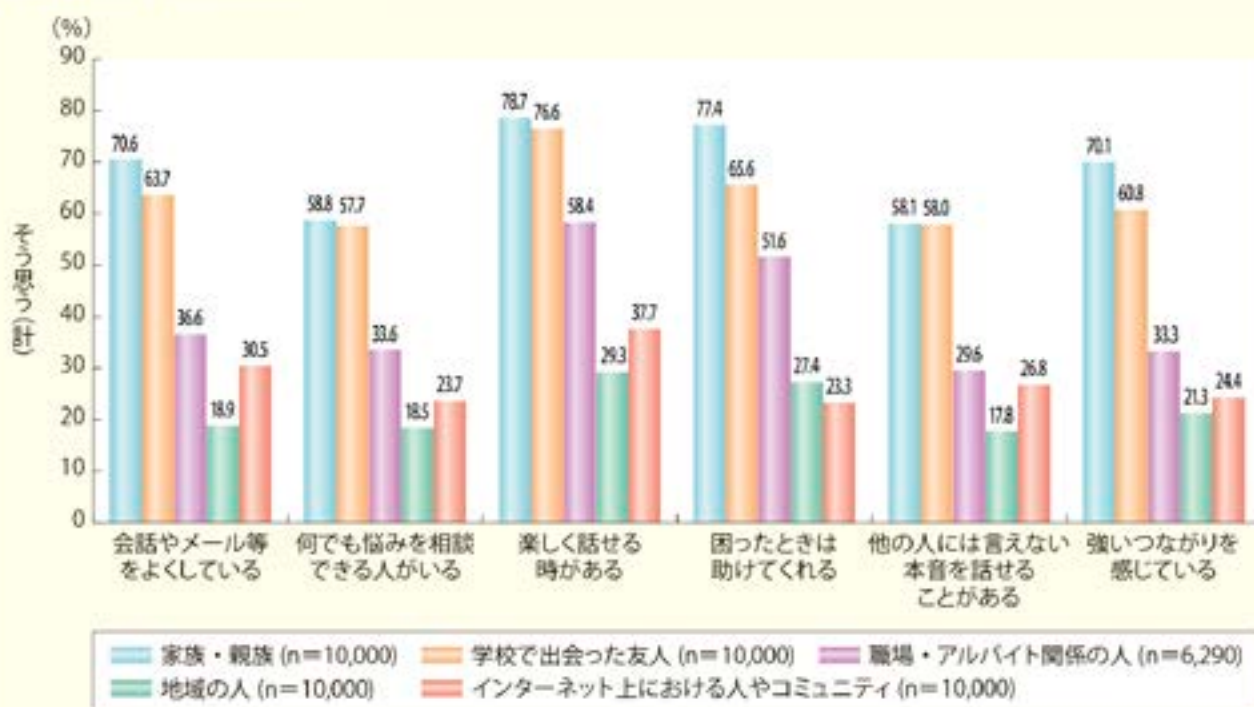
図表2 充実感について



イ 他者との関わり方

- 関わる他者を、「家族・親族」、「学校で出会った友人」、「職場・アルバイト関係の人」、「地域の人」、「インターネット上における人やコミュニティ」の5つのカテゴリーに分けたうえで、6つの具体的な項目について、それらの他者との関わり方を尋ねた。
- 「家族・親族」との関わりが6つのいずれの項目も「そう思う」又は「どちらかといえばそう思う」と回答した者の割合が最も高い結果となり、次いで、「学校で出会った友人」との関わりが高い結果となった。
- 「地域の人」と「インターネット上における人やコミュニティ」を比べると、「困ったときは助けてくれる」の項目のみ「地域の人」が高い結果となり、それ以外の項目は「インターネット上における人やコミュニティ」が高い結果となった。(図表3)

図表3 他者との関わり方



※「そう思う(計)」は、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」の合計

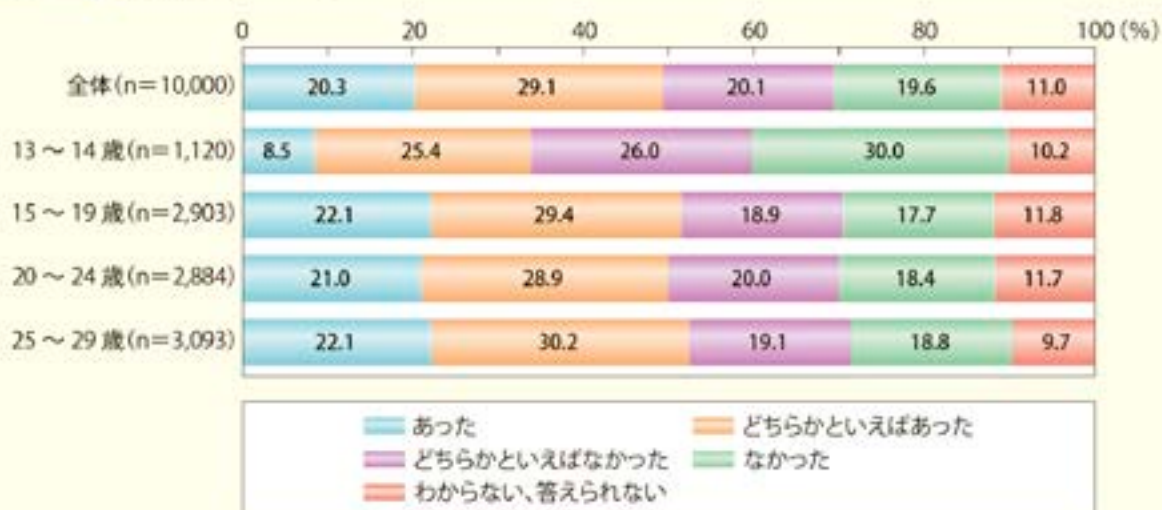
○以上のとおり、子供・若者の充実感については、年代が若いほど充実感も高い結果となったほか、他者との関わり方については、どの項目においても、「家族・親族」が最も関わりが強い結果となり、次いで、「学校で出会った友人」の関わりが強い結果となった。

2. 子供・若者が抱える困難について

ア 社会生活や日常生活を円滑に送ることができなかった経験

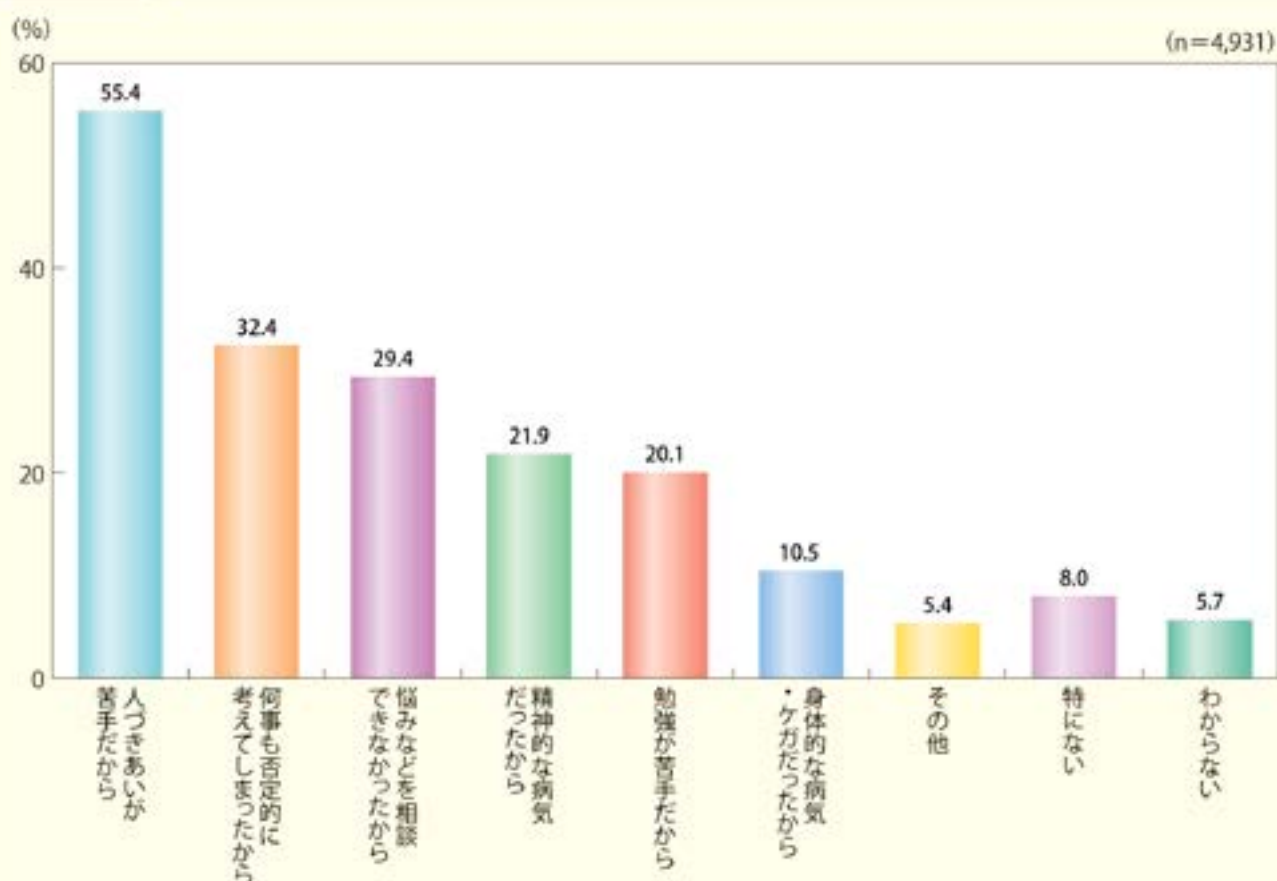
○子供・若者が抱える困難について、「今までに、社会生活や日常生活を円滑に送ることができなかった経験（以下「困難経験」という。）があったと思いますか」という質問に対する回答を見ると、「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者の割合は49.3%であり、「なかった」又は「どちらかといえばなかった」と回答した者の割合の39.7%より高い結果となった。（図表4）

図表4 困難経験について



- 困難経験について、「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者に対して、そうした経験をした主な理由について、「自分自身」、「家族・家庭」、「学校」、「仕事・職場」という問題ごとに分けて尋ねた。
- 「自分自身」の問題で、全体で最も高いものは「人づきあいが苦手だから」(55.4%)であり、次いで高いものは、順に「何事も否定的に考えてしまったから」(32.4%)、「悩みなどを相談できなかったから」(29.4%)、「精神的な病気だったから」(21.9%)という結果となった。(図表5)

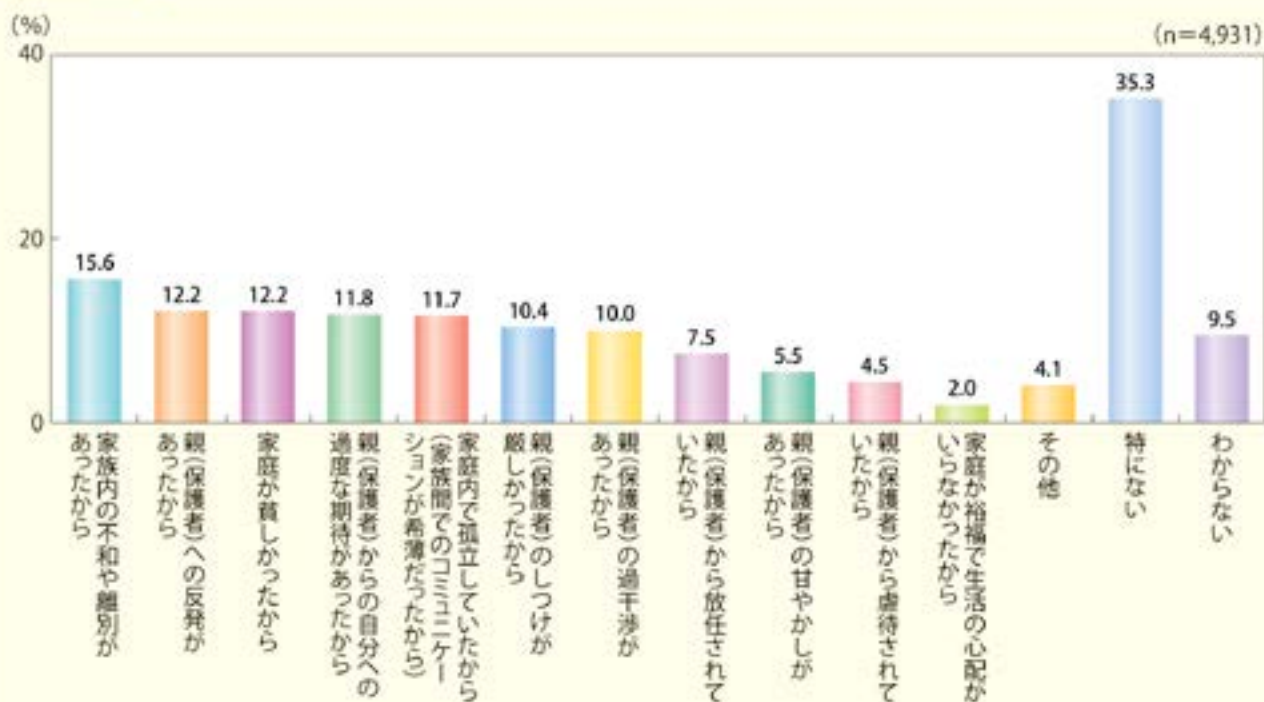
図表5 困難経験の主な理由（自分自身）について



※困難経験が「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者のみ回答
 ※選択肢は複数回答可

- 「家族・家庭」の問題で、全体で最も高いものは「特にない」(35.3%)であり、次いで高いものは、順に「家族内の不和や離別があったから」(15.6%)、「親(保護者)への反発があったから」「家庭が貧しかったから」(12.2%) という結果となった。(図表6)

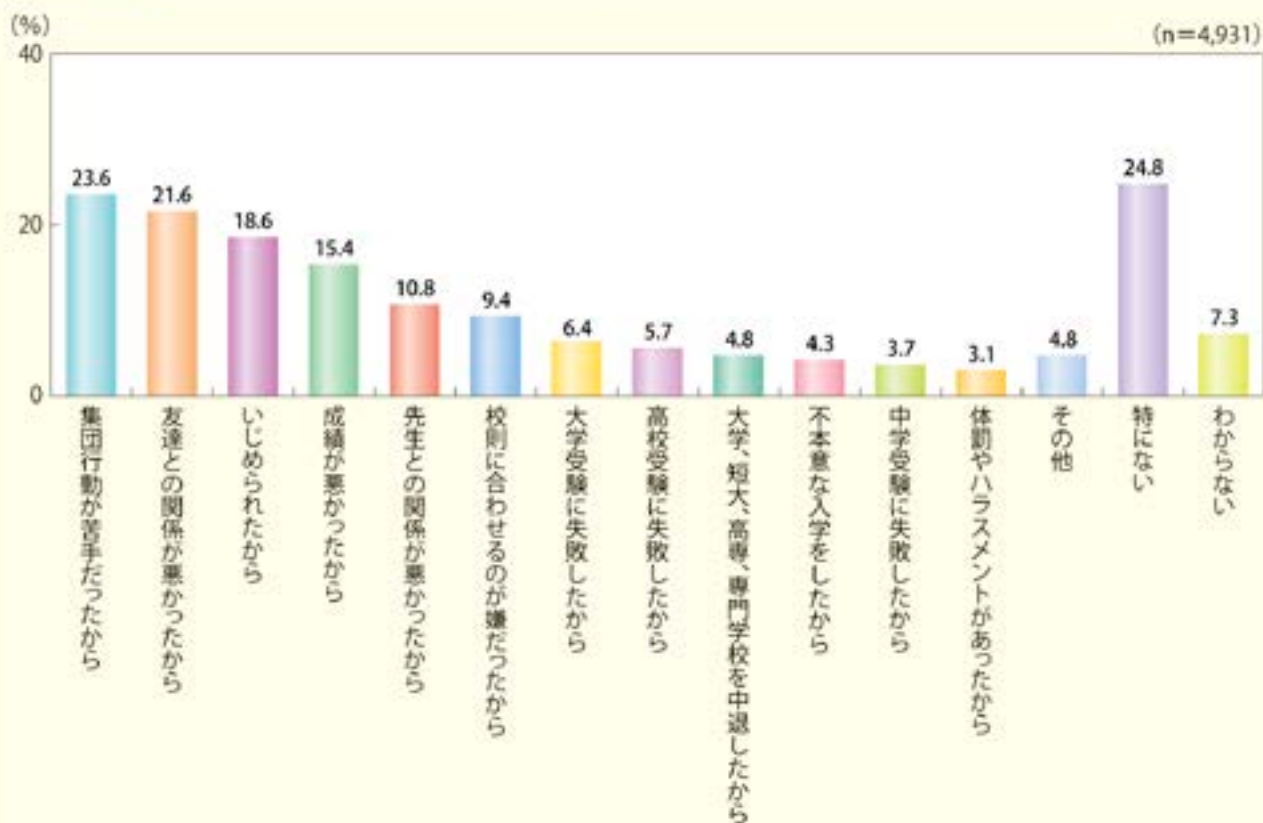
図表6 困難経験の主な理由(家族・家庭)について



※困難経験が「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者のみ回答
 ※選択肢は複数回答可

○「学校」の問題で、全体で最も高いものは「特にない」(24.8%)であり、次いで高いものは、順に「集団行動が苦手だったから」(23.6%)、「友達との関係が悪かったから」(21.6%)、「いじめられたから」(18.6%)という結果となった。(図表7)

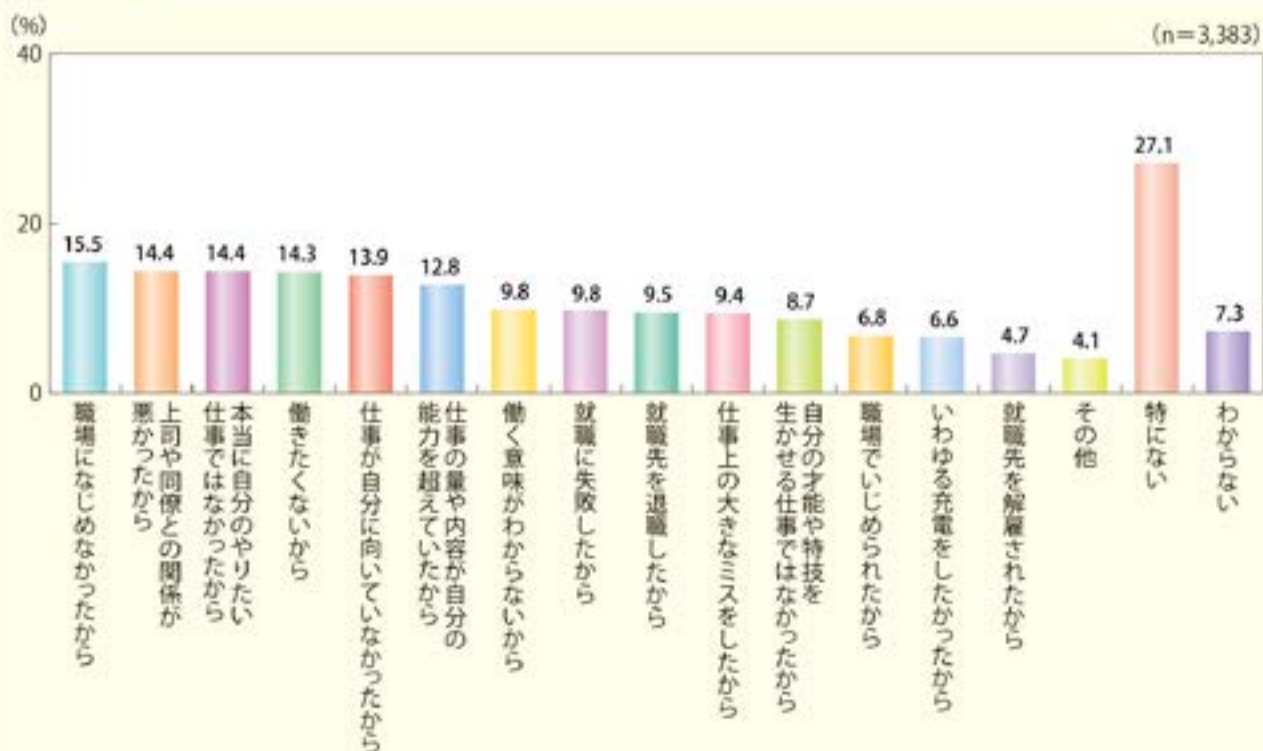
図表7 困難経験の主な理由(学校)について



*困難経験が「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者のみ回答
*選択肢は複数回答可

○就業経験がある者について、「仕事・職場」の問題で、全体で最も高いものは「特にな
い」(27.1%)であり、次いで高いものは、順に「職場になじめなかったから」(15.5%)、
「上司や同僚との関係が悪かったから」「本当に自分のやりたい仕事ではなかったから」
(14.4%)という結果となった。(図表8)

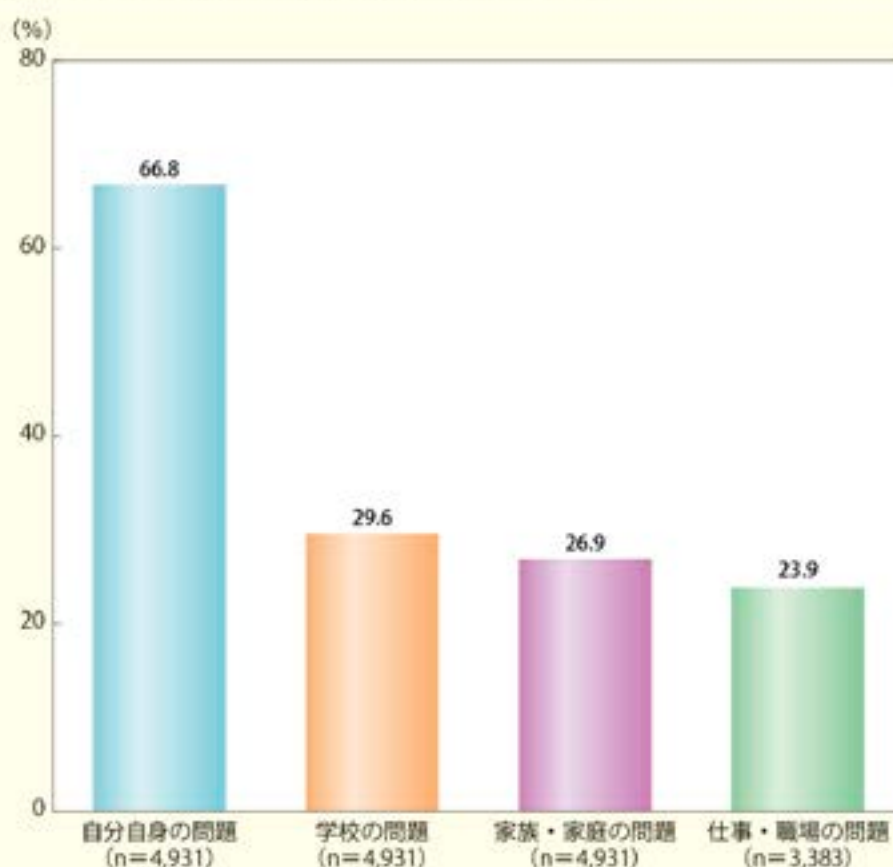
図表8 困難経験の主な理由（仕事・職場）について



*困難経験が「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者のうち、就業経験がある者のみ回答
*選択肢は複数回答可

- 「自分自身」、「家族・家庭」、「学校」、「仕事・職場」のうち、困難経験の主な理由として特に影響が強かったと思うことについて尋ねたところ、全体で最も高いものは「自分自身の問題」(66.8%)であり、次いで高いものは、順に「学校の問題」(29.6%)、「家族・家庭の問題」(26.9%)、「仕事・職場の問題」(23.9%)という結果となった。(図表9)

図表9 困難経験の主な理由として特に影響が強かったこと



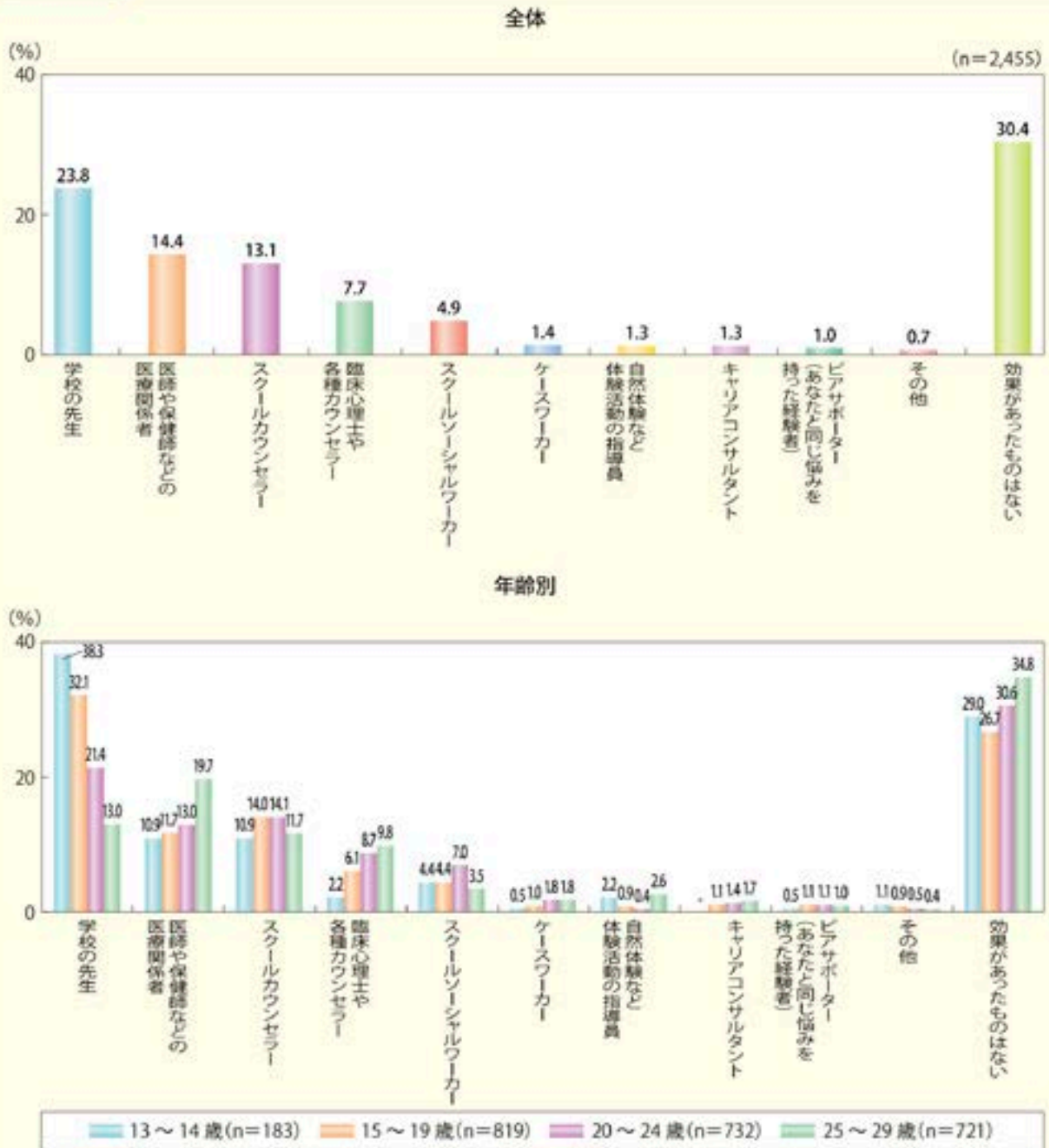
※困難経験が「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者のみ回答
 ※「仕事・職場の問題」については、就業経験がある者のみ回答
 ※選択数は2つまで選択可

- 以上のように、調査対象となった子供・若者のうち約半数が、今までに、困難経験があったと思うと回答しており、その経験の理由については、人付き合いが苦手、何事も否定的に考えてしまった、悩みなどを相談できなかったなど、自分自身の問題の影響が特に強いと思っている者の割合が高い結果となった。

イ 困難を抱える子供・若者への支援

- 困難経験が「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した子供・若者のうち、今まで支援を受けたことがある者に対して、「その中で最も役に立ったと思うものを一つ選んでください」と尋ねた。
- 支援を受けた中で最も役に立ったと思う専門職については、「学校の先生」(23.8%)、「医師や保健師などの医療関係者」(14.4%)、「スクールカウンセラー」(13.1%)、「臨床心理士や各種カウンセラー」(7.7%)などが高い結果となった。一方、「効果があったものはない」との回答も全体では30.4%を占める結果となった。
- 年齢区分別で見ると、「学校の先生」は全体と比べ、13～14歳(38.3%)が10ポイント以上高く、25～29歳(13.0%)は10ポイント以上低くなっている。なお、25～29歳では、「医師や保健師などの医療関係者」が19.7%と最も高い結果となった。(図表10)

図表10 最も役に立ったと思う支援（専門職）



※回答経験が「あった」又は「どちらかといえばあった」と回答した者のうち、今までに上記の支援を受けた経験がある者のみ回答